

札幌彫刻美術館友の会会報

いづみ 第3号

題字 國松明日香氏

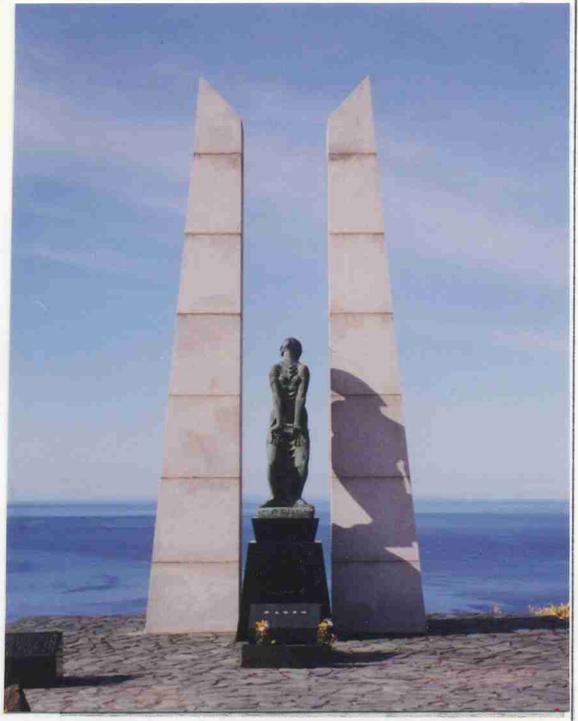
本郷新彫刻シリーズ 3：氷雪の門

宗谷・稚内公園 1963 (s38) 年 57歳作

樺太からの引揚者の多くは、戦前稚内・小樽から樺太へ渡り、終戦で稚内に引揚げてきた。

本郷は、これらの悲惨な引揚者を“大変でしたね”と迎える気持ちを込めて門の形にした。

寒い所なので門は氷の角張った形にし、像は“戦争で全てを失った私だ、天よ何か俺にしてくれ”と慟哭し、求めている形をイメージしている。(仲野)



本郷さんと野外彫刻

吉田豪介



生前の本郷新先生とは、随分親しくお付き合いさせていただいた。酒席で興にのると「俺の手は労働者の手だ」と、大きくてタフな掌をかざしてみせてくれた。世田谷のお宅や春香山のアトリエも訪ねた。長男の暁さんが札幌で一度だけ彫刻個展を開いた時、私が新聞に評を書いたら、それから会うたびに、先生は「暁をよろしくな」と言うようになった。暁さんは世田谷宅のすぐ近所に一人で住んでいたのだから、そこで泊りがけで飲んだこともある。彼はたぶん舞台や音楽の方が好きだったと思う。ベルデイのオペラのチョイ役に出た話をしながら、低い声でアイダのマーチを歌ったりすると、高名な父を持つ息子の荷の重さが少々せつなく伝わってきて、同情したことを今でも鮮明に思い出す。

先生の「泉の像」が大通公園に建った1959年、私は駆け出しのテレビ・デレクターになっていた。撮影でも中継でも「泉」越しのテ

レビ塔が、やがて札幌を紹介する映像の定番となった。それから20年で公園は彫刻だらけになり、さらに20年経った。

誰でも気づくようになったが、野外彫刻にメンテナンスが必要なことは、例えばこの会の会の仲野三郎さんが撮った彫刻写真が証明してくれている。修復となれば、木彫は難しいし、白セメント像も、寒暖の差の激しい北海道には不向きである。そしてもう一つ大切なことは、受益者側の市民感情であろう。ブラック・スライド・マントラや石山緑地が好評な一方で、札幌ドームのアート・グローブの評判は芳しくない。近頃はパブリック・アートと呼ばれるようになったが、こうした公共空間のアートは、どうやら工芸や建築とは異なるけれど、何らかの「用」の側面がありそうに思う。建ってからでは遅いのだ。受託した彫刻家はもちろんだが、認可する役所も、提供するスポンサーも、今後はぜひ市民の声を充分に確かめてから、建立の是非を判断してほしいと願っている。

(美術評論家、市立小樽美術館館長)

北の原風景に斗いを挑んだ人

—メモワール・本郷新—

原子 修

わたしと本郷新との出会いは、まず、函館の大森浜にある啄木小公園の「石川啄木座像」でした。当時、函館・子ども詩の教室で子どもたちと一緒に詩を書くという催しに指導者として参加していたわたしは、よく、子どもたちを大森浜に連れていっては、本郷新のモニュマンを題材に、詩を書かせました。

しかし、その彫刻の作者よりは、むしろ、題材としての石川啄木の方に関心があったのも事実でした。

わたしが、彫刻家本郷新に向きあったのは、北の果てのまち稚内に旅し、丘の上のモニュマン「氷雪の門」に魅せられたときでした。

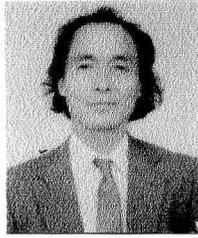
両手を絶望的にひろげ、虚空をふし仰ぐ女の深い悲しみが、なぜか、劇的なさわやかさで伝わってきて、わたしは、「鳥影」という詩を書きました。

／陽はあれど 光なく
空あれど 吹く風もなく
ただ 朔北に
涙こらえて 朝の鳥影をまつ／

後、この詩を巻頭にした詩集「鳥影」が、北海道詩人賞を受け、さらに、この詩を書として日展に出品した中野北溟氏が特選となるなど、本郷新との出会いは、すこし面映ゆいけれど、嬉しい出来事へと結びついていったのでした。

わたしが、はじめて、ご本人と会ったのも、やはり、賞の贈呈式の会場でした。わたしが北海道文化奨励賞をいただいて、最年少の故をもって一番左はじに座ったとき、北海道文化賞をいただいた本郷新は、最年長の故をもって一番右はじに座ったのでした。

わたしも亡妻も函館出身でしたので、本郷新の重子夫人も函館人とわかり、話に花を咲かせたのでした。



その後、はからずも、本郷新が、宮の森のアトリエギャラリーと作品を札幌市に寄贈される、ということになり、当時文化課長のわたしが、現在の札幌彫刻美術館創設にたずさわって初代館長となり、全身全霊をこめて本郷新の人と芸術に対峙することになったのでした。

札幌に生まれ、札幌育ちの本郷新は、彼自身、「風土とはなし」という一文の中で、つぎのように書いています。

「美術愛好者や勉強不足の評論家ならいざ知らず、作家ともあろう者が、風土性などというものを芸術価値の中に位置づけようとするのは、作画の苦斗を棚上げして自らの風土に甘えている証據で、それこそ風土性だなど常々思っていたことなのである。」

しかし、彼が、彼の内部に、北の原風景を死守していたことは、本郷新記念館の庭にアラバスタの光澤を帯びた幹を美しくさらす白樺の木立ち一つとってみても明らかです。白樺をこよなく愛した本郷新！... その、清冽な輝やきにつつまれたロマンティズムも... その、白銀の雪の美にもまごう審美主義も... 極寒の冬をはげましあって生きぬく、そのヒューマンイズムも... そして、常に新しい芸術の世界を切りひらこうとするパイオニヤリズムも、すべて、北の風土が、この彫刻家にもたらした、みえざる原質ではなかったのでしょうか。

「ああ風土！ 風土とは何という残忍な仕打ちを飽くことなく人間に加えつづけるものであるか」 前文の最後の方に書きとめられた本郷新の、この言葉こそは、彼の名著『彫刻の美』中のつぎの省察に、ぴったりと重なって、わたしたちの胸を打ちます。

「石や木や金属が美しければ美しいほど、これに抵抗することによって形は高まる。そこから彫刻の美が醗酵する」

白樺の木の美しさに象徴される北の原風景に、全精神を投げうって斗いを挑んだ本郷新の、日本の最初の本格的な環境芸術の開発者としての栄光は、今日も、白樺の枝そよぐ宮の森の丘に、永久に映えそめています。

(札幌大学教授・詩人)

札幌彫刻美術館の知名度について

友の会会長 橋本信夫

アンケートによる札幌彫刻美術館と本郷新の知名度調査の記録

札幌出身の野外彫刻の第一人者、故 本郷新先生の作品を収蔵する札幌彫刻美術館の開設20周年を期に、2000年の夏、大通り公園で市民を対象に、彫刻美術館と本郷新の知名度調査を行った。

主催：札幌彫刻美術館友の会（参加会員12名）

方法：対面聞き取りアンケート

日時：2000年7月30日（日）10~15時 晴天

場所：札幌市大通り公園（西2~5丁目）

I 札幌彫刻美術館と本郷新の知名度

質問	質問項目（回答者数：430人）	はい	
		人数	%
1	札幌彫刻美術館を知っていますか？	142	33.0
2	札幌彫刻美術館に行ったことがありますか？	49	11.4
3	本郷新を知っていますか？	95	22.1
4	本郷新の作品を見たことがありますか？	68	15.8

コメント 1

晴れた真夏の日中に、大通り公園にある本郷新の傑作「泉の像」を中心に、西2丁目から西5丁目にかけて、成人を対象に対面聞き取り調査を行い、430人からアンケートを集めた。

彫刻美術館の知名度（質問1）は33%で、市民の約3分の1が当館を知っていたが、実際にここを訪れたことのある人（質問2）は市民の1割強（11.4%）に過ぎなかった。

当美術館開設から2000年までの20年間の累積入館者数は218,111人で、これは市の全人口180万人の約1.2%に相当する。しかし、当館は国際文化都市を謳う札幌の名を冠し、郷土の誇りとする本郷新の作品を収蔵する記念館も備えた美術

館である。いかに小規模とはいえ、この程度の知名度と入館率ではいかにも物足りなく思われてならない。昨今の社会・経済事情を反映して、国内の美術館はどこも入館者が激減していると言われる中で、町の人口を上回る観客を集めて健闘している地方美術館も少なくないからである。

本郷新の知名度（質問3）は22.1%で、美術館のよりも低かった。本郷先生の業績から見て、当然美術館より高い知名度を期待していただけに意外であった。さらに「泉の像」周辺で行われた調査だったにもかかわらず、この作者名を知らない人の多かったのにもびっくりした。

II 札幌彫刻美術館の知名度の年度別・年齢別比較

札幌市では、1981年の開設時に当館の知名度調査を実施し、3,463人から回答を集めていた。そこで1981年と2000年の二つの調査成績を年齢階級別に比較し、過去20年間の知名度の変遷について考察を加えた。

質問 札幌彫刻美術館を知っていますか？

調査年度	札幌市市民文化部		彫刻美術館友の会	
	1981年		2000年	
調査地	札幌市全域		大通公園	
年齢区分	人数	知名度(%)	人数 ^o	知名度(%)
20歳代	542	45.0	*	23.0
30歳代	768	63.3	96	
40歳代	723	70.5	*	57.1
50歳代	668	69.5	238	
60歳以上	762	63.5	82	41.0
合計	3,463	64.8	416	33.0

o 年齢の判明した人の数

* 2つの年齢層の合計

コメント 2

1981年に札幌市によって行われた大規模なアンケート調査では、当館が市関連の最初の美術館としてデビューしたこともあって市民の関心も高く、知名度は64.8%（市民の3分の2）にも達していた。しかし今回の調査ではわずか33%（市民の3分の1）に過ぎず、20年前に比べてほぼ半減していることが判明した。

年齢層の比較では、開設当時の20歳代ですでに45%、また30歳代以上では60%を上回っていたが、20年後には20-30歳代で23%、40-50歳代で57%、また60歳代では41%に減少していた。特にここでは20-30歳代の若年齢層の知名度が、40歳代以上に比べて著しく低い点が注目された。

一般に美術館はミュージズの殿堂として、また地域の主要な文化拠点として年月を経るごとに広く市民の関心を深め、重みを増して行くものである。しかし、今回の調査から窺われるように、若い世代の関心は既にここになく、当館の設置目的も、希望と熱気に溢れた開設当時の活動振りも、さらには本郷新のイメージさえも世代から世代へと十分には伝えられていないことに強い危機感を覚えざるを得ない。

札幌市の数限られた貴重な文化施設である彫刻美術館と札幌市民の誇りとする彫刻家本郷新の作品が、それぞれ本来の機能と輝きを回復できるよう、友の会も積極的かつ効果的な支援を惜しまないつもりである。

「宮の森散策と美術館鑑賞の会」

についての館と会の考え方

美術館から

札幌彫刻美術館学芸員 井上みどり

美術館は、円山・三角山・大倉山・荒井山の山々に囲まれ、豊かな自然に恵まれた閑静な住宅地宮の森地区にあります。

ここはかつて本郷新が「明治の末から大正の初めにかけて、これらの山々の麓は、私のいわば揺籃の地で、草も木も、小鳥もけものたちも、四季折々の趣の中で、私の少年期のともだちであった。」と語っているように本郷の思い出の場所でもあります。

街の中心部から離れているため交通の便は良いとはいえませんが、自然環境を活かし、1999年から周辺の花々の散策と、美術館の作品鑑賞をセットとして「宮の森散策と美術館鑑賞の会」を企画しました。

鑑賞の会は、四季折々を楽しんでいただけるよう季節ごとに年間6回企画しています。

ステージⅠは桜の季節に、ステージⅡは新緑の頃、ステージⅢは夏休み期間に設定し、親子で楽しみながら美術館周辺に点在する野外彫刻を鑑賞します。ステージⅣは初秋の自然を、ステージⅤは紅葉の美しさを、またステージⅥは春雪の頃、頂上の樹木が落葉し、一年中で一番眺望の良い三角山を登山します。参加者は、手軽な2時間半の行程を森林浴しながら、野に咲く花々が季節によってうつろうさまを観察したり、野鳥の声を聞き分けたりしながら楽しめます。そして美術館では、人の手による造形の美である彫刻を鑑賞していただきます。

2002年度から開催日を全て土曜日にしたため、お勤めの方や小中学生も参加しやすくなりました。そのため、80歳代から小学生まで幅広く参加していただいています。参加者を見てみると、年6回全部に参加される方、好きな季節を選ばれる方などもいらっしゃい

ますが、大半が初めての方の方です。

この企画は、これまで来館の機会を逸していた方や、札幌に来たばかりの方にとって良いきっかけとなり、美術館の認知度と来館者層の一層の拡大に結びつきました。終了後、記念写真をお送りしているのも大変好評のようです。

本郷にとって少年時代の感性を培った豊かな自然を参加者も追体験し、美術館では彫刻家となった本郷がつくりあげた「彫刻の美」を鑑賞していただくこの企画を今後も大切に継続していきたいと思っています。

何より、自然豊かなこの環境を活かし、喧騒の中で暮らす現代人のオアシスとして、今後も札幌彫刻美術館を利用していただけよう努力してまいります。

友の会から

札幌彫刻美術館友の会会長 橋本信夫

この企画が発足して5年目を迎えようとしています。本郷新ゆかりの宮の森周辺を散策し、四季折々の風情を楽しみながら美術館で彫刻を鑑賞するという名分には、何人も逆らえない心地よい響きがあります。

初めの頃は、会員もボランティアとして参加したのですが、残念ながら体力的について行けず、ほとんどが脱落してしまいました。宮の森散策とはいうものの、基本的には山登りで、歩きながら芸術を語り、哲学的思索に耽るなどからはほど遠いものです。

当館の入館者が激減し、しかも本郷新の名前さえ知らない人が市民の5分の4を占めるような厳しい文化環境にあって、美術以外の企画で300人余の集客に成功したことは、特筆に値する大成果で、職員の奮闘振りが窺われます。

しかし、一方で、残念ながら当館には、開設後20年も経ちながら、いまだに本郷芸術の真価や素晴らしさを裏付けるにたる館独自の刊行物がほとんど見当たりません。いかに優

れた作家や作品でも、その価値を伝えるための媒体やPR努力がなければ、埋もれてしまいます。

いま、館に取って最も大切なことは本郷彫刻の魅力をできるだけ多くの市民に伝え、次世代につなげることではないでしょうか。

守り本尊の本郷新の真髓を知る上の手掛りとなる伝記や評論がなければ、いずれここは単なる收藏館(死蔵館)に過ぎなくなります。美術館は作品収集・收藏や展覧会だけではなく、美術に関する市民の多様な知的欲求に応える場でもなければなりません。

山登りを謳っての行事は、試行錯誤の流れでは許されても、美術館の恒例行事となると本末転倒のそしりを免れません。

少人数のこの美術館がIT社会に適応し、彫刻芸術の活動拠点として生き抜くには、近代化に向けた厳しい自助努力とともに斬新な展示企画や刊行物による大胆なアピールが不可欠でないでしょうか。

いま、美術館は一般の人々に門戸を開き、文化の多様性に対応するよう求められています。当館もこの潮流の中で市民とともに方向と活路を模索するよう願わずにおられません。

平成 15 年札幌彫刻美術館友の会新春講演会・新年会の開催

～彫刻家 小野寺紀子さんの世界にふれて～

石狩市 三上正一 会員

去る、1月18日(土曜日)「不二家」で、友の会恒例の新春講演会・新年会が行われました。

大寒直前の厳しい寒さにもかかわらず、三輪館長をはじめとして27人が出席しました。

新春講演会では、小野寺紀子先生をお招きし、仲野さんが撮影した先生の彫刻の写真8点を展示しながら先生の創作活動についてお話をお聞きすることができました。

小野寺先生が学生時代に本郷新先生から聞いて感銘した言葉「人生とはやりたいことをすること」、「神田フキの像」にまつわる新十津川町と奈良県十津川村のお話や「いちばん星」(札幌市厚別区役所前)の裸体作品がワンピース姿に変わったいきさつなど、沢山のエピソードが紹介されました。

特に土方歳三をモデルにした作品「若き星たち」(函館市五稜郭北海道新聞社前庭)制作の苦労話など彫刻家本人でなければ絶対語れない興味深い話の数々に、皆すっかり引き込まれてしまいました。

この後は先生を囲んで和やかな新年会へ! 「今年は未年、肥えた大きな羊が美味しいこ

とから美の概念が生まれた・・・」と橋本会長ならではの新年の挨拶、次いで三輪館長と続き、当年97歳の浦口顧問の元気な乾杯の音頭で新年会が始まりました。

お酒も入り、打ち解けた雰囲気の中、あちこちで彫刻談義が花開いていました。

あっという間の2時間が過ぎ、濱さんの乾杯で宴を閉じ、参加者一同札幌彫刻美術館の将来に夢を託しながら散会しました。

今年の新年会も彫刻家との交流を軸に、充実して過ごせた楽しい一日でした。



パソコンに詳しいボランティアを探しています・会員・非会員を問いません。
編集委員までご連絡ください。

本田明二ギャラリーの開設にあたって

近藤 泉 (遺族)

父 本田明二は、大正8年に北海道月形村に生まれ、札幌第二中学校(現札幌西高)卒業後、木彫家 澤田政広に師事し、本格的に彫刻家の道に入りました。

生前は、新制作協会、全道美術協会会員としての活動のほか、旭川市総合体育館前の「スタルヒンよ永遠に(ブロンズ)」、真駒内五輪記念公園の五輪小橋西端の「栄光(白御影石)」など、多くの野外モニュメントを制作するなど、北海道を拠点として彫刻活動を続けてきました。また、この間、札幌市民芸術賞、北海道文化賞なども受賞させて頂きました。

今年は、父 本田明二が平成元年に亡くなってから15年目となります。その間、多くの方から、「あのアトリエの作品は、どうするのか」という問いに、いつも答えに窮していました。

各方面の皆様にご相談をしましたが、なかなか明確な答えが見つからずいました。そのような中、地方での個人美術館やギャラリー開設などの記事を目にし、夫や母とも相談して父の作品を皆さんに見ていただける場を自分たちの手で創ろう、ということになりました。展示スペースは約61㎡、一部吹き抜けで屋外に展示できる中庭と開放感のある空間としました。

作品の展示については、初期の作品のほかに、父の分身のような道具類、本郷新先生ゆかりの作品、趣味で集めた陶器、図書、父の愛した釣り道具など、本田明二の人となりも含めてアトリエの雰囲気少しでも味わっていただけたらと思っています。

私たちのように父が芸術家であり、その作品の管理等をどのようにしたら良いのか、と考える方々も多いのではないのでしょうか。個人では大変なことでも、いろいろな方のご意見や協力を得ていけば、より良い状況に向か



彫刻家 本田明二先生：“みのり”像制作風景
(平岸開拓110周年記念、平岸小学校前庭に設置)

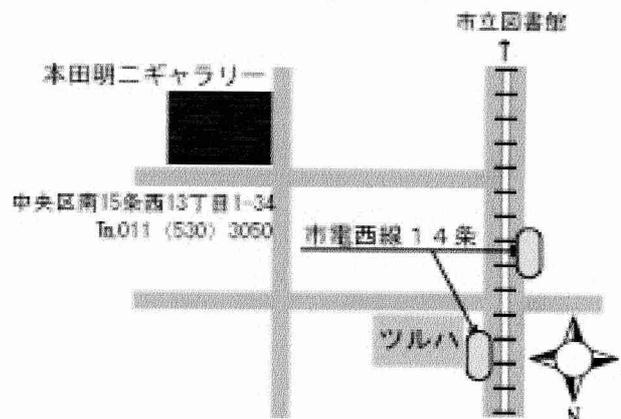
うことができるのではと考えています。

私たちのギャラリーでは、彫刻美術館友の会の皆様ともいろいろな場面で連携をとり、ともに北海道が生み、育てた芸術・文化を未来につなげていけたらと考えております。

今後とも皆様のご指導、ご協力を賜りたくお願いいたします・

本田明二 ギャラリー

住所： 札幌市中央区南15条西13丁目
1番34号北西の角
開館予定：平成15年4月22日(火)
午前10時～午後4時
土・日・祝祭日は休み



問い合わせ： 011-530-3050 近藤まで

抜海の目

ゼロ+1=1ではない、マイナスだ

彫刻美術館友の会の会員の中に、美術館の前途に対する不安が囁かれて久しい。

その危機感の原因は入館者の減少で、設立当初の2万人余が年々減少の一途をたどり、いまや5千人割れ目前の状態にある。

館ではそれなりの対応をとってきたと思われるが、その事業のひとつとして1999年から行われている「宮の森散策と美術館鑑賞の会」～俗称山登り～について、少し考えて見たい。

この事業は市の広報に掲載され、マスコミにも何回か取り上げられたため、山好きの市民の間にそれなりに浸透しているものと思われる。一応外見的には集客効果があるように見えるが、その実態はどのようなのだろうか。単純に考えても約500人の電話応対や当日のガイド等で、職員一人の1ヶ月分近い労力がこの事業に振り向けられていることになる。

ところで、札幌彫刻美術館の設立の目的は何だったのだろうか。本郷新の彫刻・業績を知らせるためなら本郷新記念美術館とすれば良い。あえて札幌彫刻美術館と謳ったのは、ここが札幌の彫刻美術の中核であり、ひいては北海道の彫刻文化の振興に寄与するという意気込みがあったからではなかろうか。

その意欲は、今何処に！

今年で創立満22年目を迎えるが、前半の10年の事業展開に比べて、後半10年の事業はマンネリ化し、毎年同じパターンの繰り返しである。

この行き詰まりを打破するには、道内各地にある90を超える本郷新の作品の、制作から設置までの様々な情報を、できるだけ早く掘り起こし、工夫を凝らして展示するなどの取り組みが必要だ。これは本郷新を知る人が年々高齢化して行くなかで、早くしなければ大事な情報も消えかねず、時間切れ寸前の状況にあるからである。

数少ない職員の労力を本来の目的以外の事業に費やして何ら反省することのないのは、彫刻美術館の本務を果たしていないことの現れで、10年先、5年先、そして来年を見越し、どう事業を展開すべきかを考えれば、今の山登りプログラムが本末転倒なこととは誰の目からも明らかである。これは館運営に関

する目的意識の低さが招いたもので、職員に時間的余裕があり過ぎるからであろうか。

もうすぐ本郷新の生誕100年、開館25年が巡ってくる。考えなければならないこと、やらなければならないことが山積している、と思うのだが、また開館20年の轍を踏むのか！

今日も日が暮れる。

雪に埋もれた彫像

この冬、晴天続きの週末の午後に幾度か彫刻美術館を訪れた。しかし、いつも本館前庭にすくと立つ「わだつみのこえ」像に向き合っ、地に蹲る女性像「砂」と「堰」の2体が、雪に埋もれて見ることができなかった。

そこで、これは芸術の森の野外彫刻群と同様に、四季折々の屋外彫刻の風情の面白さを味わって欲しいという館のメッセージ、と理解した。しかし、この美術館の数限られた主要作品が、折角の来館者に気付かれることもなく置かれている状態に奇異の念を抱かずにはいられない。

どこでも美術館やギャラリーの玄関前の作品は、広告塔そのもので、美術館のシンボルとして最大限の敬意が払われているからである。

前庭の大事なスペースに選ばれて設置された作品には、当然市民の興味や期待も込められている。しかし美術館や彫刻の事情に疎い庶民の感覚では、権威ある美術館から大事にされていないらしい作品となれば、あれはあってもなくてもどうでも良い格落ち作なのだ、と映りかねないのである。

同じ場所に置かれながら、物理的な大きさや高さの違いから、自然のいたずらに災いされ、市民の感想さえも得られなかったとすれば、抜海先生も浮かばれまい。

北海道の美術館はどこも冬の来館者が少なく、その対策に様々な努力が払われている。しかし毎年冬期間に開催される当館の後期常設展は人気がなく、昨年度後期の入館者はわずか720人で、ほとんど冬眠状態にある。さらに有名な本郷新のブロンズが雪に埋れて、見ることさえ適わないとなると、市民の来館を期待する方が土台無理というものであろう。

来年の冬からは会員の除雪ボランティアを募り、皆で屋外彫刻の除雪奉仕に参加しようではないか！

友の会だより

平成15年度

友の会総会と講演会のご案内

場所：札幌彫刻美術館本館

日時：平成15年5月17日（土）

総会： 13:30～14:30

講演会： 14:30～16:00

演者： 川上りえ氏（彫刻家、道展会員）

仲野三郎会員の特別講演

去る3月7日に道立近代美術館で開催された北海道美術館学芸員研究協議会で、友の会役員仲野三郎氏による特別講演が行われました。

全道から集まった50名余の学芸員を前に、“北海道の野外彫刻の現状と問題点”というテーマで、永年撮り溜めてきた彫刻写真をスライドで説明しながらの熱演でした。

個人による1800点にも及ぶ膨大な野外彫刻の写真や資料の収集努力こそが、まさしく地域文化を支える草の根運動の原点ではないでしょうか。これらの貴重な北海道の文化財産を今後の友の会活動でも活かして行きたいものです。（高橋淑子）

彫刻美術館友の会ホーム・ページ

<http://sapporo-chokoku.jp>

開設工事が遅れて申し訳ありません。新年度からお目見えの予定です。よろしくご贖員のほどお願いいたします。

寄稿のお願い

- * 会報いずみは年に4回発行の予定です。
- * いずみを面白く、賑やかにするために会員の皆様からの記事をお待ちしています。
- * 彫刻にまつわるものであれば、エッセイ、短歌、記録など、何でも結構です。
- * 字数は800字までです。

新会員の募集

- * この会は彫刻美術館の支援、彫刻芸術の鑑賞と会員の親睦のための楽しい組織です。
- * どなたも気軽に入会でき、特典もあります。
 - a 年間、同伴者1名を含め、常設展と特別展を無料で鑑賞。
 - b 当館の優待券と諸資料の配布。
 - c 当館主催の講演会、講座、旅行会などの案内。
- * 年会費：

イ 正会員	2千円
ロ 賛助会員	5千円
ハ 団体会員	1万円
ニ 終身会員	2万円
- * 詳しくは友の会事務局にお問合せ下さい。入会申し込み用紙をお送りいたします。

編集後記

- * いずみ第1号は新生友の会の発足に、第2号は会員の親睦に、そして第3号は会の主張にピントを合わせました。そのため今回は、少々理屈っぽいかもしれません。
- * 編集委員会は会報編集の素人集団です。しかし全員、いずみの方向を定めるべく試行錯誤しながら頑張っています。
- * この楽しい友の会の文化活動に参加し、いずみを育ててくださる方々を求めています。
- * 経験の有無は問いません。PC・HPに詳しい方も探しています。
- * 市民の目線で、彫刻文化支援の草の根運動に役立てられるような会報作りが念願です。（橋本）

札幌彫刻美術館友の会 会報「いずみ」No. 3

財団法人札幌彫刻美術館内 編集責任者 濱 久子

〒064-0954 札幌市中央区宮の森3条12丁目

電話とファックス：011-(642)-5709

平成15年4月1日発行

編集委員の連絡先：電話とファックス

齊藤美年子：643-7246

濱 久子：893-5212